

TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

大学礼拝

WORSHIP SERVICE

クリスマス特集号

CHAPEL NEWS



第107号 2008年12月

東北学院大学宗教部

〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

TEL (022) 264-6428

巻頭言

「本当に、この人は 神の子だった」



宗教部長
佐々木 哲夫

イエスは大声を出して息を引き取られた。…百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

マルコ福音書 十五章三七〜三九節

「事の終りは始めにまさる」という聖書の言葉があります。イエス・キリストの誕生を祝うクリスマススの時期ですが、彼の最期に立ち会った人であるローマ軍百人隊長に注目したいと思います。彼は十字架刑の現場責任者でした。イエス・キリストが大声で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫んで息を引き取る姿を見るや、百人隊長は、自分に言い聞かせるように「本当に、この人は神の子だった」とつぶやいたのです。彼の心にどのような変化が起きたのでしょうか。

明治維新の頃の代表的思想家の一人に横井小楠がいます。彼は「人は、単に本を読んで知識を得るだけでなく、それを合点しなければいけない。知ること合

点することは違う」との趣旨の話をしています。他方、最近の『分かるとはどういうことか』という本に「経験の中で知った事が、記憶され、蓄積され、整理され、筋道が通ったとき、人は本当に『分かった』ということになる。それを『合点がゆく』とも言つ」との記述があります。両者とも合点する重要性を説いています。このことに百人隊長の姿を重ね合わせたいと思います。エルサレムの治安維持の職務を担っていた彼は、イエス・キリストの情報を少なからず得ていたことでしょう。その彼がイエスの最期を目の当たりにしたとき、合点したのです。その時、彼の口を衝いて出てきた言葉が「本当に、この人は正しい人だった」のです。

さて、私たちもイエス・キリストを知っています。例えば、聖書の言葉「この方は、…十字架にかかって、自らその身にわた

したちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです」は私たちの合点すべき事として示されています。ところで、合点する、すなわち、信じるということは、私たちの人生の原動力として働きます。奇しくも、先ほど引用した二人が同じことを言っております。「合点することは別のことにも十分に通用する」「本当に分かったことは応用できます。外の現象にも応用できるのです。」まさにその通りです。イエス・キリストを知るということは、それだけに留まらず、私たちの生きる原動力になります。どのような場面において働くかには「正解や「見本」はありません。一人一人の生涯における千差万別の事柄において原動力となるからです。実に、クリスマスは、そのような神の子の誕生の瞬間だったのです。

「クリスマスの前にして」



理事長
平河内 健治

教会暦には、待降節（アドヴェント）と呼ぶ期節が設けられています。イエスの降誕を祝うまでのおよそ四週間、くわしくは、十一月三〇日に最も近い日曜日からクリスマスの前日までの期間を言います。

イスラエルの人々が長く待ち望んだ救世主（メシヤ）の誕生という神の約束がいよいよ成就され、実現された喜びを、単に過去の出来事として味わうのではなく、今も起きる事件として実感できるように、また、その誕生を待ちわびる期待感を一層高め、喜びとわくわく感を日々味わえるようにするために、この待降節は設けられています。ルカによる福音書は、イエスの誕生を述べる前に、第一章で、後にイエスの先導者となるヨハネの誕生の告知がイエスの誕生の告知の前であったことを述べ、ヨハネが洗礼者ヨハネとして、荒野の生活での厳しい鍛錬の後、イエスの道を備える人となったことが予告されています。クリスマスを前に、ここでは、ルカによる福音書第一章の

五節から二四節までのヨハネ誕生の告知の物語から、どのような心の準備をしたらよいかを学んでみたいと思います。

ユダヤの王ヘロデの世に、ザカリヤという名の祭司があり、エリザベツという名の妻がいました。二人とも神の御前に正しい人で、主の戒めと定めとを落ち度なく行っていました。

しかし、二人には子供は恵まれず、年老いていたので、エリザベツがいくら神に願っても子供ができる見込みがありませんでした。

しかし、不思議なことが起こります。天使がザカリヤの前に現れ、妻のエリザベツが男の子を産むことが告知されます。ヨハネと名づけられるこの子は、イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別をもたせて、準備のできた民を主のために用意する。人となること、すなわち、イエス・キリストの先導の役割をする人となることが予告されます。

ザカリヤはこのことを信じることができず、天使に口答えします。そのために、口がきけなくさせられてしまいます。いよいよ子供が誕生し、約束された通りのヨハネという名前をつけるまで、口がきけませんでした。天使は口をきけなくなった理由を述べます。「時が来れば、実現する私の言葉

を信じなかつたからである」。信じて待つというこの大切さが示されています。

大学受験生向けに書かれた講談社出版の『ドラゴン桜公式副読本、十六歳の教科書、なぜ学び、なにを学ぶのか』という本があります。国語学者の金田一秀穂、英語学者の大西泰斗、民間人から公立中学校長になった藤原和博といったそうそうたるカリスマ的教師が国語、英語、社会など何故、何を学ぶのか自説をそれぞれ述べています。講師の中で変わっているのは、カリスマ・セラピストで催眠療法家の石井裕之で、彼は、どうして受験勉強が苦しいのか、次のように述べます。「これは結局「合格できないかもしれない」と思っているから、苦しいんですね。でも、同時に「合格できるかもしれない」という可能性があるからこそ、苦しんでいるともいえる。合格するのが当たり前だと思っていれば、勉強は楽しいはずなんです。あるいは、合格なんて絶対に無理だと思っていれば、大学受験なんて苦しくない。さっさとあきらめて遊び回るでしょう。そのどちらでもない不安定な場所にいるからこそ、苦しいわけです。とにかく、早く受験勉強の苦しみから逃れたい」というメンタリティーは、マイナスに作用するだけだということを理解してください。「そんな時どうしたらいいのか、彼はこう続けます。「どうしても苦しいときには、自分の成長を確認するのがベストです。たとえば、去年の自分と比べてみたら、勉強のレベル

も成長しているし、内面的にも成長している。先月は知らなかった単語を、こんなにたくさん覚えた。その喜びを噛みしめながら、前進するようにしましょう。合格したら夢のような生活が待っていると想像するのは、大事なことです。でも、それよりもっと大切なのは「いま現在の自分が、一歩ずつ成長している」という事実のすばらしさを知ることなのです。だって、実際にみなさんは日々成長しているのですから。」これは、進級、卒業、就職などに不安を感じる時にも当てはまることでもあります。

私の東北学院中学高校時代の恩師月浦利雄校長はよくこう言いました。「今勉強している成果は直ぐ出ない。一年後だ。」先の目的や成果に囚われず、今やれていることを楽しめと言っている。待つことの大事さ、今という時間の大切さを教えてくれた。

歌人俵万智の歌に「誰を待つ何を吾は待つ（待つ）という言葉すつと自動詞になる」という私の好きな歌があります。目的にこだわらない、人やものに依存しない自由な今の気持ちを表現しているのを見ることができるところです。

時を経て新しい自分が生まれ、めぐり合えるよう、確実に成長させてもらっている自分、神様から育てていただいている今の自分を信じながら、クリスマスを迎えたい。天使が言う「時がくれば、実現する神の言葉を信じる」ということはこのことを意味しています。

クリスマスにあたり東北学院大学
創立当初の先人の思いに触れよう

3L精神と地の塩・世の光 「先人の著書にも学びたい」



学院長・大学長
星宮 望

に再建された東北学院中部部の新校舎の正面入り口に掲げられていた言葉です。その時以来、東北学院スピリットを象徴する3L精神として親しまれてきております。この3L精神と同様に、長年、東北学院の在校生・卒業生に大切にされてきた聖書という言葉に「地の塩・世の光」があります。これは、新約聖書の

時間をかけて「フランス革命史」を書き上げたということです。このような高尚な生涯を送った人がいることを覚えたいと思います。

東北学院大学では、毎朝の学校礼拝を重視しています。クリスマスをむかえるにあたり、ぜひ聖書から学び、教職員の先輩からの言葉にも耳を傾けていただきたいと思います。また、内村鑑三をはじめとする、優れた先人たちの語りかけにふれるための読書もお薦めします。

東北学院はキリスト教を土台として創立された学園です。東北学院の創立者である、押川方義先生、ホーイ先生、シュネーダー先生の三人の校祖の先生方が本学を創立し、成長させてくださった、その心に近づきたいと思えます。さて、その心を表しているものの一つが、「LIFE、LIGH

HT、LOVE」という言葉です。これは、私が、一九五〇年代に、東北学院中学・高等学校に六年間通っていたときの東二番丁の校舎（現在では、中学・高等学校が小鶴新田キャンパスに移転したためにその面影はラーハウザー記念東北学院礼拝堂の地下にある記念資料室に行かなければ見ることはできません）に掲げられていた言葉でありますし、そのルーツを探れば、一九二二年（大正二年）の「仙台大火」の後

MTアイ福音書五章二三～二六節に記されている言葉です。私は、東北学院中学・高等学校での六年間、毎朝の礼拝を通して多くのことを学びました。その中でも最も心に深くしみていたのがこの「地の塩、世の光」です。その後、大学生の頃に、このことに関する一冊の本に出会いました。それは、内村鑑三著「後世への最大遺物」という薄い冊子です。これは、明治二十七年に箱根で開催されたキリスト教徒夏期学校での講話をまとめたもので、その後長い間読み続けられていました。岩波文庫に収録されておりますし、今ではインターネットで検索しても見ることが出来ます。

内村鑑三は、後世に残すものとして、ま

ず金（財産）をとりあげ、例えばフィラデルフィアのジラードという人がその財産を



Christmas Message 「クリスマス随想」



キリスト教学科長
原口尚彰

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなた方のために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼いの葉桶の中に寝ている乳飲み子を見付けるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

(ルカによる福音書一・二〇―二二)

今年もクリスマスの時を迎えました。クリスマス頃になると、遠い過去に過ぎた様々なクリスマスの思い出が、当時の懐かしい情景と共に私の脳裏に甦って来ます。青年時代に通った東京の教会のクリスマスや仲間と出掛けたキャロリングの風景は三〇年以上経った今でもはつきりと思い出せます。神学生時代にインターン生として講壇に立った久留米の教会のクリスマス、新米牧師時代に自分が牧する神戸の教会で会員達と共に迎えたクリスマスも忘れれること

は出来ません。また、西宮の大学の教師の頃に家族と共に通った教会のクリスマス会のこと懐かしく思い出されます。他方、外国で迎えたクリスマスも印象深いものでした。一九八〇年代にアメリカで博士課程の勉強をしていた頃にシカゴの黒人教会で祝った賑やかなクリスマス、厳寒のミネソタの深い雪の中で迎えたホワイト・クリスマス、九〇年代にスイスにいた頃に近くの教会で参加したクリスマス礼拝の印象も鮮明です。恩師の家のクリスマス会では、暖炉の傍に大きなクリスマスツリーが立てられた部屋でクリスマス食事をし、食後に恩師手製の星形クッキーをご馳走になったことを覚えています。クリスマスはどの年のクリスマスであつても、何かしら暖かい思い出と結び付いています。それは、共に過ごした人々の心温かさから来るものもあるでしょうが、本質的には神の子キリストが人となって私たちに下に宿ったという神の愛の出来事から来るものでしょう。クリスマスは世界に救いと平和をもたらす出来事に他なりません。しかし、日本で過ごすクリスマスと西欧のキリスト教国で過ごすクリスマスには、クリスマス過ぎし方に大きな差があるように思えます。それは、日本のクリスマスが謂わば点であるのに対し、西欧のクリスマスは線である印象が強いです。教会暦で

は、クリスマス、つまり、降誕節は、一月二五日のクリスマススの日に終わるのでなく、始まり、翌年一月六日の顕現日(東方の三博士が宝物を持って幼子イエスを訪れた日)まで続きます。西欧社会はクリスマス時期はクリスマス休暇の時期であり、社会の活動は停止し、静かな中で教会と家庭でクリスマスの祝いがなされ、クリスマス雰囲気は二日間維持されます。クリスマスツリーや飾りは、一月六日まで片付けられませんし、顕現日には教会で礼拝もたれます。大晦日はシルヴェスターと言って広場に集まって新年の到来のカウントダウンをしたり、夜中に爆竹を鳴らして騒ぐ習慣がありますが、元日に特別な祝いがあるわけでもありません。クリスマスの時間の歩みは大きな中断なく顕現日まで続きます。ヨハン・セバスチャン・バッハに『クリスマス・オラトリオ』という平明な合唱曲があります。これは、音楽一家の家長であったバッハが子供達のために作曲したものです。クリスマス二日間の一曰ごと音楽章が宛てられています。聖トマス教会の音楽監督であったバッハには教会暦は同時に生活の暦であったでしょう。

これに対して、日本では多くの人達がクリスマスは二月二五日で終わると考えており、翌日にはクリスマスツリーや飾りを片付けてしまいます。多くのキリスト教会ですが、教会暦の伝統に忠実な教会を除いて、クリスマス飾りを一月六日まで残すことをしません。この現象は日本のような非キリスト教国では教会暦と社会の祭事歴とが一致しないことから来ています。日本の社会では一月一日が最大の祝祭日であり、二月三日と二月一日の間には、古い年と新しい年を分かち大きな切れ目が存在します。従って、二月二五日が終わるとクリスマスの余韻は消え去り、慌ただしい年の瀬になり、新しい年を迎える準備に人々は忙しくなります。クリスマス鐘の音は何時しか遠くなり、一〇八の煩惱を払うために打たれるお寺の除夜の鐘の音の低い音が、大晦日の夜の町に響くのです。

私はキリスト教信仰を生活に根付かせるためには、日本の教会はもう少し教会暦を重視すべきであると考えています。クリスマスツリーや飾りが一月六日まで残っていると、かえって目立つために年が明けても変わらない神の愛を証するシンボルとして機能するのではないのでしょうか。一月一日は教会暦では主の命名日とされています。ユダヤ人として生まれた幼子イエスは、ユダヤ教の習慣に従って生まれて八日目には割礼を受け、イエスという名前を付けられたのです(ルカ二・二二)。新年を迎える喜びは継続するクリスマスの喜びの中に位置付けることが出来ます。教会暦を大切に、クリスマスの喜びが持続するものであることを覚えていたいと思います。

各キャンパスのメッセーじ

Izumi

泉キャンパス

大学宗教主任

永井 義之



この号を手にかけている頃は、ちょうど大学クリスマスが開かれていることと思います。一年生諸君にとって大学クリスマスは初めての経験かもしれません。第二次大戦の後、戦後日本社会にクリスマスは年中行事として定着してきました。家庭で祝われるクリスマス、仲間や友人たちとのクリスマス会、プレゼント交換、等々、その形はさまざまですが、年の瀬十二月の行事として欠かせないものであるようです。

クリスマスは CHRISTMAS と書くように、キリスト (CHRIST) を拝む礼拝 (MAS) が本来の姿です。大学クリスマス礼拝を通じてぜひ本来のクリスマスを確認し、それが何であったのか、またどんな意味があるのかを考えてほしいものです。



Tagazyo

多賀城キャンパス

キリスト 数学科

佐々木 勝彦



クリスマスが近づく、「主を待ち望むアドヴェント」と題する讃美歌が歌われます(二四二)。このアドヴェントは「待降節」と訳され、その名の通り「主イエス・キリストの誕生を待ち望む季節」を指しています。この待降節はクリスマスの四週間前から始まり、今年は十一月三〇日の日曜日がその第一主日に当たります。

教会では、この日から週毎に、四本あるクラウンソックに一本ずつ火をともし、ゆき、クリスマスを迎えます。クラウンとは、ヒイラギで作られた花輪のことです。この儀式は次のような期待を表現しています。それは、旧約聖書に約束されたように、この世の暗闇を照らす光として救い主イエスがやってくるとの期待です。

ここには、「向こうからやってくる時間」という思想が現れています。時間には、このように「過ぎ去る時間」だけでなく「やってくる時間」もあるのです。アドヴェント、それはこの「確実にやってくる時間」を日常生活の中で経験するのです。

Tsuchitoui

土樋キャンパス

大学宗教主任

北 博



イエス・キリストの誕生予告の場面で天使は、生まれて来る子は「インマヌエル」と呼ばれるであろう、と告げます(マタイによる福音書一章二三節)。インマヌエルとはヘブライ語で、「神我らと共に」という意味です。つまりイエスは、神が私達人間と共にあることとしるしとしてこの世に生まれて来たのです。しかしヘロデ王は、それを聞いて不安を抱きました(二章三節)。神が身近にいるということは、ある意味で恐ろしいことです。今まで横暴の限りを尽くしてきた権力者であれば、尚更でしょう。

イエス・キリストは、十字架にかけられ苦しみに耐えて死ぬことによって、神が私達人間と共にあることを示しました。十字架上のイエス・キリストは、どうにも度し難い私達の罪の姿であると同時に、神の救いの深さをも示しています。そのことに感謝して、今年もクリスマス喜び祝いしましょう。



1 クリスマスって何ですか？

クリスマス(キリストのミサ)とは、イエス・キリストの誕生を祝うためのミサ(典礼もしくは礼拝)のことです。どうして、イエス・キリストの誕生が、クリスマスとして特別に祝われるのでしょうか。

第一に挙げられる理由は、神が人となられたことです。即ち、天地万物の創造主である神が、被造物の世界において、人間を導かれたのです。換言するならば、人間の五感で認知し思考できる世界において、神が人間と出会われたのです。

第二に挙げられる理由は、旧約聖書の預言者たちが待望していた救い主(メシ

ア)の誕生だったということです。犠牲的な贖いの業(十字架の出来事)によって人間の罪を赦す、という救いを実現する神の子の到来でした。

ペテロの手紙は、そのことを「イエス・キリストは(十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました」(ペテロ二章二四節)と証言しています。

六世紀の修道僧ディオニシウス・エクシグウスは、聖書に記載されている年代とローマ皇帝の治世年数とを累積対照することによって、イエス・キリストの誕生の年数を割り出し、それ

を境に歴史を紀元前(B. C. = Before Christ)と紀元後(A. D. = Anno Domini)に二分しました。それほどに、イエス・キリストの誕生は画期的な出来事だったのです。

皆さんは、クリスマスをどのように理解しているでしょうか。それは、クリスマスの日に何をすることで明らかにされます。プレゼントを交換する、みんなで楽しくパーティをするなど様々でしょう。今年のクリスマスは、東北学院大学やキリスト教会でのクリスマス礼拝に出席し、本当のクリスマスを味わっていただきたいと思えます。

(佐々木哲夫)

2 なぜ12月25日がクリスマスなのですか？

西方教会(ローマ・カトリック・プロテスタント)の伝統では、三世紀の末頃からキリストの誕生日として守られて来ました。東方教会(ギリシヤ正教系)では四世紀頃から一月六日公現日に降誕を同時に祝って来ました。西方教会との調整を経て、十二月二十五日には降誕を一月六日には異邦人への救い主到来を祝うようになりました。

なぜ十二月二十五日なのかについては、古代教会で考えられていた独特の歴史

観にもとづく日にちの算定があるようです。また、冬至に近いことから異教の「太陽の誕生祭」に対抗して「義の太陽」(キリスト)の出現を祝ったものであるとも言われますが確かなことはわかりません。ひとつ確実なことは四世紀から五世紀にかけてキリストの受肉と人格に関する論争があり、キリスト養子論の、異端説を退けるために、キリストは神の御子として誕生されたことが東西両教会で強調されたという事実です。つまり、クリスマスを十二月二十五日に祝うということは

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」(ルカ二・十一)という、神の御子が人間の形をとり(受肉)、私たちの近くにおいてになったことを意味します。

(永井義之)



3 クリスマスはキリスト教の他の行事と比べてどのくらい重要なのですか？

キリスト教の行事の主要なものは、イエス・キリストの生涯に由来しています。例えば、イエス・キリストの誕生を祝うクリスマス（降誕日）、東方の占星術者たちが訪れて主イエスを礼拝したことを記念する公現日（顕現日）、復活日の四〇日前の水曜日（六回の日曜日を除く）を灰の水曜日、また、この四〇日間を四旬節（受難節、レント）と呼び、特に、四旬節最後の週を受難週（Passion Week）と呼んでいます。受難週の金曜日は、イエス・キリストが十字架につけられた聖金曜日（Good

Friday）、次の日曜日は復活日（イースター）です。復活日から五〇日目の日曜日に聖霊が降り、教会が誕生しました（聖霊降臨日・ペンテコステ・五旬節）。このようなキリスト教行事を織り込んだ暦を教会暦と呼んでいます。この暦は、クリスマス前の四主日を含む一月六日までの期間である待降節（アドヴェント）の第一主日から始まります。

さて、教会暦と直接関係しない行事もあります。聖餐式、洗礼式、幼児祝福式、母の日、花の日、収穫感謝日、婚約式、結婚式、葬式、昇天者記念式などです。いずれの行事も意義深いもので、その重要さに優劣をつけることは

難しいことです。しかし、強いられるならば、クリスマスとイースターを双璧として挙げることもできるでしょう。特に、クリスマスは、東北学院大学の学事暦の中に公にされており、大学クリスマス礼拝として行事化されています。（佐々木哲夫）

4 大学でのクリスマス礼拝ではどのようなことをするのですか？

大学礼拝はふだん一時間と二時間の間の三十分のなかでおこなわれています。しかし、大学クリスマス礼拝は冬休みの直前、十二月の最終講義日午後から各キャンパスで行なわれます。特別な礼拝と位置づけられ、春、秋の特別伝道礼拝のように時間も毎日の礼拝より延長されています。この日には特別講師によるクリスマスメッセージと特別編成の学生合唱団による「メサイア」（ヘンデル作曲）が演奏されます。

この礼拝が毎日の礼拝と異なるところは、礼拝のなかで献金があることです。

世間一般でも年末助け合いなど、この時期に寄付を募っていますが、私たちも礼拝で集めた献金を、援助を必要とするさまざまな福祉施設やNPO団体、個人にその働きを助け励ますために送金しています。送金先及び送金額の詳細は、翌年一月発行の東北学院時報に掲載し報告させていただきます。

大部分の一年生諸君にとっては、東北学院に入って初めてのクリスマス礼拝を今回迎えることと思います。いままで経験して来たクリスマスと大学で経験するクリスマス礼拝に違いはあるのでしょうか。ぜひ、クリスマスメッセージを通して本来のクリスマスとは何であったのかを

確認していただきたいと願っています。

また、献金を通して、私たちのわずかな献げ物であっても、それが必要とする人々に届けられ喜んでいただけるのは、このクリスマスの喜びのときにふさわしいものです。いままではクリスマスプレゼントといえば「受ける」だけのものですが、本当に必要としている人々に「与える」ことを学ぶのも、このクリスマスが意義あるものとなるのではないのでしょうか。（永井義之）

2008年度 宗教部の活動

通年

大学礼拝

礼拝(朝) 土樋・泉・多賀城キャンパス

月～土曜日

礼拝(夜) 土樋キャンパス

毎週水曜日

寄宿舎礼拝

泉女子寄宿舎

毎週月曜日

泉男子寄宿舎・旭ヶ岡寄宿舎

毎週火曜日

聖書研究会

土樋・泉・多賀城キャンパス

宗教部会 毎月

四月 『大学礼拝』一〇四号

(新入生歓迎号) 発行

キリスト教活動のハンドブック発行

第十三回スプリングカレッジ

(十二日)

五月 春季宗教教育強調週間特別伝道礼拝

・泉(十三日)

・土樋キャンパス「朝」(十四日)

説教者 山本 裕司牧師

・多賀城(十四日)

土樋キャンパス「夜」(十四日)

説教者 藤森 勇紀牧師

六月 『大学礼拝』一〇五号

(春季特別伝道礼拝特集号) 発行

キリスト者推薦学生との懇談会

(二四日)

礼拝奉仕者懇談会

・土樋(十一日)

・多賀城(二七日)

・泉キャンパス(二〇日)

七月 第三回青山学院合同

チャブレン会議(二八～二九日)

第三四回サマーカレッジ

(二八日～三〇日)

九月 第五四回教職員修養会

(二日～三日)

講師 高祖 敏明先生

一〇月 秋季宗教教育強調週間

特別伝道礼拝

・泉(八日)

・土樋キャンパス「朝」(九日)

説教者 宮川 眞一氏

・多賀城(八日)

・土樋キャンパス「夜」(八日)

説教者 大江 浩氏

『大学礼拝』一〇六号

(サマーカレッジ・

秋季特別伝道礼拝号) 発行

十二月 泉キャンパスクリスマス(五日)

キリスト者推薦学生との懇談会

(二日)

『大学礼拝』一〇七号

(クリスマス特集号) 発行

大学クリスマス

・土樋・泉(二〇日)

・多賀城キャンパス(十一日)

説教者 関川 泰寛先生

二〇〇九年

一月 第三回キリスト者教員研修会

(二六日)

二月 礼拝オルガニスト懇談会(九日)

礼拝司会者懇談会(九日)

三月 大学礼拝説教集(第三号) 発行

研修会・修養会発題報告集発行

編集後記



この号はクリスマス特集号です。今年度最終号になります。クリスマスに関わる思いは一人一人様々なものがあることと思います。しかし忘れてはならないのは、クリスマスを中心にはイエス・キリストがおられるということ。主イエス・キリストの平安と喜びが、この時期全ての人々の上にありますよう祈ります。(NA)